

余暇行動研究の動向と今後の方向

とくに 研究の方法論について

コーディネーター 西野 仁 (東海大学)

パネリスト 原田 宗彦、山口 泰雄、川西 正志
(ペンシルバニア州立大) (鹿屋体育大学) (中京大)

●はじめに

現代社会において、レジャーやレクリエーションについての人々の関心が高まりを見せるにつれ、より詳細なレクリエーション研究への要請が、政治、経済、教育など多方面からよせられてきている。こうした状況に対処するために、本学会は、研究会やシンポジウムを開催してきた。

とくに、研究の領域を暫定的に、原論、行動研究、プログラム開発、政策研究、資源・計画論とし、第11回大会から専門分野別シンポジウムを開催してきた。それは、次のようなテーマで行なわれ、レクリエーション研究の全体像を理解し今後の方向をさぐるために、重要な役割をはたしてきた。

第11回大会 〔資源・計画論分野〕

『わが国の野外レクリエーションの現状と課題』

コーディネーター 前野 淳一郎

パネリスト 進士五十八、中田 錦一郎、有賀 一郎、麻生 恵、毛塚 宏、宮林 茂幸

〔プログラム開発分野〕

『レクリエーション・プログラムの開発』

コーディネーター 北森 義明

パネリスト 宮下 桂治、安原 輝雄、鈴木 秀雄

第12回大会 〔政策研究分野〕

『シニア・エイジのレクリエーション行政とその展開』

コーディネーター 金崎 良三

パネリスト 浅田 隆夫、秋吉 嘉範、木下 茂徳、諫山 秋利

第13回大会 〔原論分野〕

『現代社会におけるレクリエーション概念の再検討～我国のレクリエーション研究史からの問いかけ～』

コーディネーター 小田 切毅一

パネリスト 眞田 碩哉、仲村 要、影山 健、西野 仁

本シンポジウムは、これら一連のシンポジウムの一応の最終会として位置づけられる。

ところで、行動研究の分野は、人間のレジャーやレクリエーション行動現象を解明していくことが、中心テーマであろう。しかし、いざ、具体的にアプローチする段になると、どのような手順と方法で取りくむべきかがはっきりしない。

こうした現実を背景に、今回のシンポジウムのテーマ『余暇行動研究の動向と今後の方向～とくに研究の方法論について～』は、設定された。

●本シンポジウムのすすめ方

シンポジウムは、まず、“レクリエーション研究の変遷の中での行動研究の位置づけと、最近の研究の特徴”を概観(西野)したうえで、“現在、余暇行動研究が世界でどう行なわれているか”(原田)ということの報告から出発する。そして、次に、具体的な研究事例として、“レジャー行動の国際比較”(山口)と“地域社会におけるスポーツ行動研究”(川西)を、研究方法を中心に報告する。

そして、それらの話題を基に余暇行動研究の今後の方向を、とくに、研究の方法論に焦点をあてながら討論し、行動研究分野の方向づけのための、新たな問題提起ができればと考える。

●レクリエーション研究の変遷と行動研究

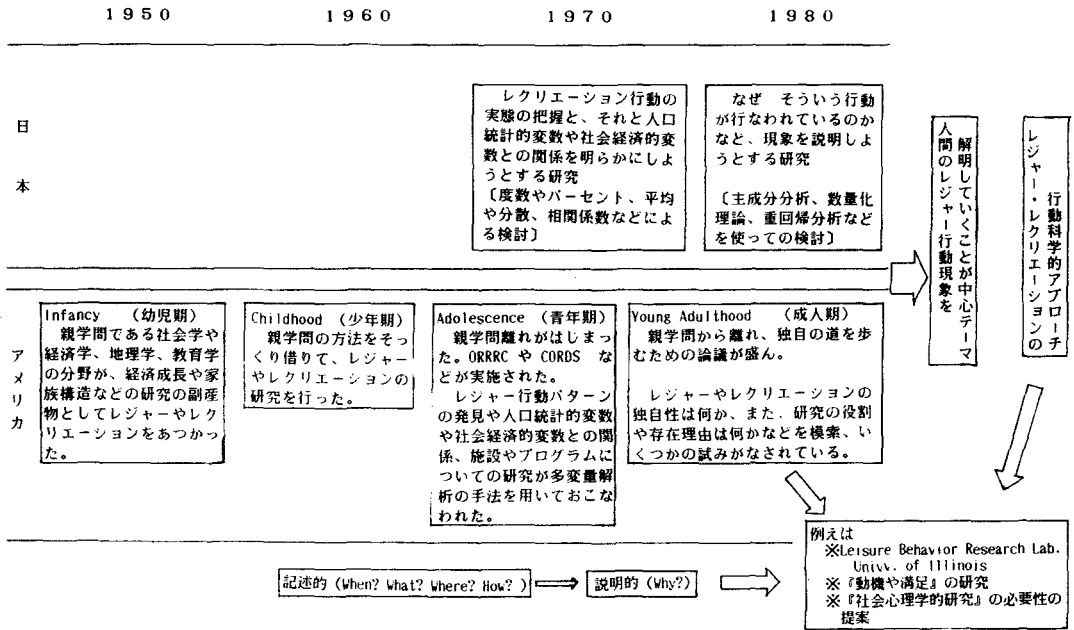
行動研究の動向と、今後の方向を考えるにあたって、まず、レクリエーション研究がどのように展開されてきたかを大まかにとらえておく必要がある。

図1は、日本とアメリカのレクリエーション研究の展開と今後の方向についての概略¹⁾である。

レクリエーション行動の、実態把握という“記述的な段階”から、なぜ、そういう行動が行なわれるのかという現象を“説明する段階”へと移行しつつあり、そのために、いわゆる“行動科学的なアプローチ”が、一つの手法としてクローズアップされつつあるという論旨である。

とくに、レジャー・レクリエーションの行動科学的アプローチは、『レジャー・レクリエーション行動は、人間あつての現象で、ライフ・スタイルや性格や価値意識の異なる人間が行なう行動を、研究対象の中心に据えなければ説明できないことが多

図-1 日本とアメリカのレクリエーション研究の展開と今後の方向



い』²⁾という考えにたつものである。

- 最近の研究で話題になっていることがら
ところで最近の研究で話題になっていることがら
はどんなことであろうか。簡単にまとめておこう。
- ・ コンピューター・プログラムを利用した研究が多い。
- ・ 社会心理学的方法が多く行なわれている。
- ・ 地理学・文化人類学などからのアプローチもできてきている。
- ・ 世界的規模での研究が進められている。とくにアジアや中南米への関心が高い。
- ・ レクリエーション・ビジネスに関する研究がで

てきた。

- ・ Quantative Analysis (定量分析) から Qualitative Analysis (定性分析) を併用することの重要性が指摘されている。
 - ・ 基礎的研究と応用的研究をどう結びつけるかが論議されている。
 - ・ レクリエーション研究より、より広い概念のレジャー研究へと 対象が拡大している。
- など。

1) 、 2) 西野『第13回大会 専門分野別シンポジウム配布資料』1983